

フョイエルバッハの宗教批判と身体論

河上 睦子（相模女子大学）

☆「マルクスにはないフョイエルバッハ哲学・思想の独自性」とは？

—彼の宗教批判哲学について「身体論」という研究視角から読解する—

・1990年代以降の研究

・UB-München 4° Cod.ms.935.（ミュンヘン大学図書館所蔵資料）

Gesammelte Werke, 1-21, hrsg.v. W. Schuffenhauer, Berlin 1967.

・国際的な研究交流・・・国際フョイエルバッハ学会、フョイエルバッハの会等

・多様な研究視角と年代史（初期・中期・後期）研究

「身体論」という研究視角

(1)宗教批判哲学（宗教批判論と感性哲学との一体性）の独自性

中期から後期への発展：宗教的意識の構造や「心情」の視座による宗教分析→人間の自然的基盤と人間関係的基盤という視点から、宗教の心理構造について、依存感情・エゴイズム論（二次）、欲求・願望論（三次）による「実践的」な批判分析という独自性

(2)身体論＝①宗教批判的身体論と②身体哲学構想

①中期…キリストやマリアの肉体やキリスト教の身体技法の分析＝身体文化論の先駆

後期…「食すること」「性」「健康・病気」に関する宗教批判的身体論の追求

②身体についての哲学的分析…後期の「肉体力」を基本とした身体哲学構想

・〈身体をもつ〉＋〈肉体である〉という身体的人間観（→身体・自然の改造の問題）

・自然と社会との交点としての身体（→社会論的な座標をもつ身体論）

(3)後期思想の再評価

彼の感性哲学は、労働の視点とは異なる人間・自然との関係論、とくに「受苦」や「共生」という視座をもっている。それは後期には、エゴイズムや自己保存衝動という独自の「感性的活動」論や「自然・人間」と「人間・人間」との両輪をもつ感性主義的倫理学（自由意志論批判の幸福衝動論）の構築へと向かっている＝生命・環境倫理思想の先駆

(4)「女性的原理」論

近代批判思想としての「女性的原理」の提唱

マリア論に見られる「宗教とジェンダー」との関係についての独自の分析

拙著『宗教批判と身体論—フョイエルバッハ中・後期思想の研究』御茶の水書房、2008